

遥かなるペテガリ岳 東尾根に再挑戦

鈴木 貞信

往復五〇^キの行程を 四泊五日かけて踏破

ボンヤオロマップ岳登山口まで車で入れた平成二八年五月、仲間四人で東尾根からペテガリ岳を目指したが、山頂二^キ手前で時間切れになり撤退している。その時は快晴で、手が届きそうな所からの素晴らしいペテガリ岳山頂を眼下に焼き付け、是非再度挑戦したいと思っていた。

しかし、その年の秋、十勝地方が複数の強烈な連続台風に遭遇し、農地や一般道路、そして多くの林道にも甚大な被害が及んだ。ボンヤオロマップ川林道も例外ではなく、登山口手前一〇^キ地点の歴舟川林道分岐にゲートが出来、両林道とも車両通行止めとなった。平成二九年、林道の改修を期待したが、ボンヤオロマップ川林道は数カ所の道路決壊と橋三カ所流失で修復の見込みなく、山行も諦めていた。

平成三〇年四月に森林管理署に確認すると、ボンヤオロマップ川林道の改修目処は全く無しとのことであつた。来年に延ばすことも考えたが、八十年代に入り体力低下が心配なので意を決し、常本さんと相談して林道歩きで山行計画を立てた。

そして山頂までの往復五〇^キを、五月二四日から二八日まで四泊五

日かけて二人で登頂し、念願を果たすことが出来た。

ボンヤオロマップ岳まで

五月二四日 晴 常本車で自宅を

出発し、更別経由でボンヤオロマップ川と歴舟川林道分岐ゲート横に駐車。身支度後一二時五分にスタート。林道は数カ所の決壊箇所を迂回したり高巻いたりで通過。橋流失三箇所はビニール袋で靴を濡らさないようにして、膝下の渡渉をする。三回目にはビニール袋に穴が開き、登山靴の中に水が入る。登山口手前のペテガリ橋は流失を免れたものの欄干は破損して無くなり、橋の上には流木が折り重なっており、これに乗越し



土場の沢にかかる樹氷橋も流失

て標高三五五^ミのボンヤオロマップ岳登山口に二五時着。

登山ポストの上、一・五^ミの高さまで水没の跡があり、登山口の駐車場やテント場は泥沼化している。この日のテント場は洪水被害が無かった一〇〇^ミ上流の台地にした。

五月二五日 小雨 前夜からの雨

は朝になっても止まず、濡れた重いテントを手分けて担ぎ、翌日からの天気回復予報を信じて四時二〇分出発。登山口ポストの名簿には、昨年以来の記入はなく、今年は我々が初めてか。

尾根上の標高四六〇^ミまでの登山道は不明瞭で獣道などを利用して登る。標高五四〇^ミには鉄梯子が二カ所あり、登り切ると間もなく六〇^ミ一^ミ標高点の尾根に乗る。ボンヤオロマップ岳までの登山道は笹が被つていて、不明瞭で時々獣道に迷い込む。朝からの雨でダウンウェア等を着込むが、それでも寒い。

このまま今日のテント場予定地である早大尾根分岐まで行くのは低体温のリスクが予想されるため、一二時四〇分にボンヤオロマップ岳山頂で行動を中止し、午後停滞と決めてテントを張った。山頂北斜面には雪が十分残っていて水の確保に問題なし。テントで寛いでいると夕方方には天気回復し、外に出ると夕焼けが美しい。

国境稜線分岐 1573m からのペテカリ岳



灌木・笹・這松漕ぎの末 夕闇迫る山頂に立つ

五月二六日 快晴 テント撤収時にフライ内側に氷が張り付いている。払い落としてもなかなか取り切れない。かなり冷え込んだようだが、早

朝から快晴で天気予報通りとなる。今日のテン場はペテカリ岳山頂とし、日の出直後の四時二〇分に出発。ボンヤオロマップ岳山頂は樹木があり眺望が良くないが、一時間ほど進むと素晴らしい眺望となる。

一四一七㊦標高点近くの東斜面に

は多くの雪渓が残っている。数力所のアップダウンと巻道、獣道を使い、早大尾根分岐の一五一八㊦標高点に八時四〇分着。

ここから国境稜線の一五七三㊦標高点まで、八回のアップダウンと不明瞭な道、背丈を超える灌木漕ぎは腕力も必要となる。特に国境稜線手前の灌木に苦戦しながら一五時二五分着。

ここから山頂に至る稜線の南北両側は深い沢に切れ落ちていて、まさに日高の山の様相である。ペテカリ岳へと続く這松と残雪のコントラストは特に素晴らしい眺めである。岩場と這松漕ぎで歩き辛いところだが、眺望を楽しみながら進む。

一六二〇㊦のペテカリ岳肩手前は見通しが効かない笹藪で、道も不鮮明。適当に笹を漕いで登ると肩に出た。北側には雪渓があり、這松を避けて雪の上を歩くが、滑落すれば斜度四〇度の斜面を数百メートル下まで落ちるので、慎重に歩を進める。

灌木・笹・這松

漕ぎで予定時間を超過したが、念願の一七三六㊦ペテカリ岳山頂に一九時一〇分に立つ。日没間際で夕日に染まった山々を眺め、山座同定してい

15 時間行動で頂上に立つ



ると今日の苦労も吹き飛んでしまい、感激に浸り至福の時を過ごす。山頂では雪も近くで取れた。今日の行動を振り返りながら寝袋に入る。

これまでの経験の中でも もっともハードな山行

五月二七日 晴 今朝もテントに

氷が付いている。ペテガリ岳山頂は早朝から快晴で下界は雲海。朝日を浴びた勝幌・札内・エサオマン・ルベツネ・カムエク・ヤオロ・一八三九・中ノ岳・神威・ソエマツ・ピリ

力等を眺めていると時間が経つのも忘れてしまい、予定より三〇分遅れの四時二五分に出発する。

今日はボンヤオロまでの予定。国境稜線から東尾根の分岐（一五七三標高点）までは雲海の上で眺望を楽しみながら快調に下山するも、そこから早大尾根分岐までは相変わらずの藪漕ぎとなる。雪渓上には、昨日は無かった熊

の足跡が我々の足跡の上にあり、緊張し鈴を強く鳴らして辺りを見回しながら通過する。

ボンヤオロ山頂に着いたのは日没後の二〇時。急ぎテントを張って潜り込む。ダニ対策で事前に予防薬を衣服等に散布していたが、それでもテントの中では体や衣類に付いたダ

ニ五匹を退治する。

五月二八日 快晴 今朝は気温も

上がり、テントに氷は付かなかった。

今日はボンヤオロを下山し、林道を歩いてゲートまでの長旅となる。ボンヤオロ山頂で樹木の間から見えるペテガリ岳方面や早大尾根を眼下に焼き付け、四時一五分出発。ダニの多いこの時期、五分歩いたら五、六匹がズボン等に付くのを払いながらボンヤオロ登山口に二時着。大休止。

帰りの渡渉箇所は濡れても良いので登山靴のまま川を渡る。林道脇には多くの花（二〇種類ほど）があり、疲れているので花の写真を撮りながら休み休みゆっくり戻る。ゲートがある駐車場に帰着したのは、六時三五分であった。

今回の山行では五日間、他の登山者には誰にも会わなかった。遥かなるゝ遥かなるペテガリ岳東尾根山行を振り返りながら、帰りの温泉を楽しむに車上の人となった。

ペテガリ岳には、静内側と神威山荘側から西尾根を二回登頂しているが、山頂からの眺望があまり良くなかった。今回のこのコースは私の過去の山行経験で一番ハードな山行であったが、それに勝る眺望を楽しむことが出来、ご一緒頂いた常本良一さんに感謝している。

ペテガリ岳山頂から 1839m 峰を望む

